



楽しさを求める新たな潮流への期待

学園花の村 伊藤公博

今年には宮城正雄翁が95歳にして亡くなられたことで忘れることのできない年になった。

新党乱立、政界再編のニュースを見聞きするに付け、一民間人でありながら、ひたすら農村の疲弊を憂い、その再生にすべてを捧げた翁の生き様に畏敬の念を抱く。好々爺然としながら、胸に秘めた軽視を許さぬ百姓魂、静岡と八王子と住む所は隔っていたが、私はそれに魅せられた。20年前、小田原の報徳博物館ゼミで耕作放棄地を憂う翁の講話に打たれた先輩諸兄が支援に動き始めた時、農業の何たるかを全く知らない私でも役に立つことがあると仲間入りを許された。以来事務的役割を通じて翁の生き様を垣間見ることができたのは幸せであった。

学園花の村世話人変更のお知らせ

平成二十五年一月より倉馬の里長および「はなの村だより」編集発行人の担当者が左記のように変わります。

くらまの里長 柴桂子さんから藤本将さん

広報担当 伊藤公博さんから松井道夫さん

柴さんは近世女性史辞典編纂のお忙しい中平成21年から4年に亘り里長として、市民農園、花壇の開設、維持管理池の埋設、側溝の整備など注力いただきました。

また伊藤さんには「はなの村だより」の編集発行に「尽力いただきました。誠に有難うございました。」

学園花の村機関紙第70号

2012年12月3日(月)

編集兼発行人 伊藤公博

八王子市片倉町937-78

TEL・FAX

(042) 636-8291

E-MAIL

mitoh@alto.ocn.ne.jp

大正五(1916)年生まれのお翁77歳、今の私の歳に耕作放棄地をなくす運動を立ち上げた。学園花の村運動である。翁は平成20年9月、掛川の大日本報徳社で「二宮翁夜話と私」という演題で講演し次のように話した。

「私が古谷報徳社の社長をしていた平成5年に、当時の小田原の報徳博物館長佐々井典比古先生から古谷報徳社の話をしてくださいということで、古谷報徳社の話と、その時考えていた「報徳文化村構想」の話をしました。なぜかという当時後継者不足で耕作放棄地が目立って増えてきた。目を転すると都会には農業をやりたい人が沢山いる。これを組み合わせたらどうかという考えが私にはあった。やれなくなつたから土地を貸したいという農家から農地を提供してもらって、都会の人が耕せば、耕作農地は増え、自給率は高まる。」

当時「団塊世代」と称される大量の高齢者予備軍を過疎になつた農村に呼び戻そうとの思いであったが、どうすればそれが実現するのか、徒手空拳のわれわれにとつて途方もない難題であった。宮城翁は国内はおろか遠くイスラエルのキブツ、韓国にまで教えを求めた。そして最良の指導者津野幸人先生に出会つた。先生は一人最低1反を耕作する20町歩の実頭農場を提案した。そして参加者に「無農薬有機栽培・自助努力・相互扶助」の3つを理念とすることを求めた。これが実頭農場「光陽の里」を有する学園花

の村の出発点だ。平成17年光陽の里の経験を踏まえ2町歩ほどの倉馬の里が新たに設立された。今われわれの周りにはこれまでの活動経験を踏まえ、新たな場所でも小さな農業を推進実践する仲間が出現した。また、同じ頃に出発した多くの志を同じくするグループがいる。宮城翁が喜んで東京まで出向き、活動に参加された全国組織「100万人のふるさと回帰支援センター」もその一つ、この度10周年を祝つた。祝賀の会場が高橋公代表理事は「リーマンショックを契機として団塊の世代の次の世代の若者たちのふるさと回帰志向が高まつた。2011年度は5000件を超える電話等の問い合わせがあり、若者の利用が増えた」と報告した。一人で耕作放棄に待ったをかけたかに見えた宮城翁の運動は多くの仲間がいたのだ。しかしながら最近の農業白書では「近年その増加率は鈍化しているものの、平成22(2010)年においては、平成17(2005)年と比べて3%増加し40万haと、滋賀県に匹敵する面積になっている。」(農林水産省「農業センサス」と、平成2年以降一貫して増え続けている放棄地問題の深刻さを報告している。TPPはこの潮流に更なる拍車をかけることになるのか。耕作放棄地をなくすため互いに手を携えよう。私の手元には多くの活動グループからの便りが届く。時代はふるさと回帰を望む若者への対応を求めている。若者を巻き込んだ耕作放棄地に対抗する潮流に、楽しさを活動のベースとする私たちの実頭農場での経験を伝えたい。農業は楽しいということを伝えたい。新しい環境で活躍している仲間とのたよりの交換から伝わってくる楽しさに明日への大きな期待を抱く。